

やさしい経済学—名著と現代

マーシャル 『経済学原理』

放送大学教授 林 敏彦



近代経済学の形成に大きな影響を与えた英国の巨人、アルフレッド・マーシャル(一八四二—一九二四年)を語るには、「クールヘッド」「ウォームハート」という彼の言葉から始めねばならない。

この言葉はケンブリッジ大教授に選出された彼の、「経済学の現状」と題する就任公開講義(一八八五年)に登場する。ここでマーシャルは経済学研究の重要性、緊急性を強調したうえで、先人の業績、とくに経験に重きを置くドイツ歴史学派に敬意を払いつつ、自らの経済学者としての姿勢を開示した。

門下のケインズが後年著した『人物評伝』(大野忠男訳)によると、そのむすびでマーシャルは、基本姿勢のひとつ

として「ケンブリッジが世の中に送り出す、冷静な頭脳と温かい心情を持ち、彼らを取りまく社会的苦悩と取り組むためにその最善の能力の少なくとも一部を進んで捧(ささ)げよう」と志し、……そう

講義におけるこのメッセージは、実は政治経済学への偏見が根強いケンブリッジの学者社会にも向けられていた。

1 冷静さと温かさ

冷静な頭脳と温かい心情の持ち主を育てたい、と述べたわけだが、彼はヴィクトリア朝大英帝国のエリートたるケンブリッジ大生に、いわゆるノブレスオブリージュ(高い身分に伴う義務)を説いたとも言えよう。そして、「社会的苦悩」を語る裏には、理論の現実への適用を重視する彼の哲学と、人々の生活水準の向上にとどまらず、人間と経

済社会そのものの進歩に対する彼の切実な希求があり、この主旋律は主著『経済学原理』をも貫いた。

ピギーやケインズらを育てのちにケンブリッジ学派(狭義の新古典派)の祖とよばれるマーシャルの闘いは、経済学の地位向上への闘いでもあった。そして、その基本姿勢もまた、クールヘッド、ウォームハートだったのである。

はやし・としひこ 43年生まれ。スタンフォード大博士。大阪大名誉教授

やさしい経済学—名著と現代

マーシャル 『経済学原理』

放送大学教授 林 敏彦

あろう。

『経済学原理』はリカード、ミルらの古典派と、シエウォンズらのいわゆる限界革命の担い手の双方に通じたマーシャルが一八九〇年に刊行した彼の主著である。

この書の核は、需要・供給分析であり、需要曲線と供給曲線の交点で価格と取引量が決まるという市場均衡の理論を深め発展させた。それに絡んで供給側の要因を説く古典派の考え方と限界革命の担い手による需要側の分析を、長期・短期の概念で統合(のちに詳述)したのをはじめ彼が示した概念・理論など(需要の弾力性、消費者余剰、内部経済と外部経済など)は大きな光跡を残してきた。

2 人間の現実直視

しかし、より大きく輝くのは新概念などの背後にある「人間探求」の視点、つまり、人間と現実社会に対する真摯(しんし)で深いまなざしである。

例は尽きない。需要の法則が語られる際には、今日中学校の教科書にものっているような右下がりな需要曲線が示されている。しかし、彼の場合は財A、Bといった抽象的な表現を超えて、たばこ、シルクハット、茶、ウエディングケーキ、靴下、ガス、鉄道、芸術作品、著作権、劇場、住宅などじつ

生まれ移ろうものであることを明確に見据えていた。人間は機械的に欲望や満足を生み出すとみる立場とは違い、何を欲し何に満足するかは人間の自己形成の過程のなかで複雑に変化するという視点をしっかりとっていたのである。

彼の需要・供給分析には「新古典派(狭義)の礎を築いた」に加え「ワルラスの一般均衡分析に対し部分均衡分析を提示した(のちに詳述)」など、さまざまな学説史上の位置づけが与えられてきた。

に多くの具体的な財を登場させている。これは、今日のミクロ経済学者と決定的に異なる点であり、彼が理論の形式的優美さの追求に満足せず、その奥の人間活動を直視する「あくなくき事実の収集家」であったことを雄弁に物語る。

さらに彼の需要理論は、財に対する個人の欲望や効用(満足)は理論上の世界ではなく社会生活の真ったただ中で

放送大学教授 林 敏彦

前回述べたマーシャルの人間直視の哲学を下敷きとして、今回は彼が『経済学原理』の需要・供給分析などにおいて結晶させた概念や理論をみていこう。

代表的なもの一つは彼が生産(供給)の調整時間に「短期」「長期」「超長期」の区別を導入したことである。市場における一時的な均衡とは、いったん市場に出荷された穀物の場合のように、販売(供給)量を調整するのが不可能なほど短い期間のことである。そこで市場価格を決めるものももっぱら需要であり、その後にある限界効用(その財を追加的に消費することで得られる追加的な満足)である。

短期と長期は、調整できる生産要素の範囲で分けられる。主に設備量まで可変と見なされるのが長期、設備量は

不変として、もっぱら他の技術情報の拡散、金融・会計・法務など補完的機能の集積などがそれである。このため、代表的企業の内部不経済を外部経済で相殺できれば、供給曲線は水平となり、市場での均衡価格を決めるのは需要ではなくなる。

3 需要・供給の分析

このようにマーシャルは、調整時間が短いほど需要側の要因が市場価格を左右しやすく、長期になるほど供給側の要因の影響が強まるとして、限界革命を率い価格決定をめぐる需要側の要因を強調した

が右上がりとなる(増産に伴い製品一単位あたりのコストが膨らむ)のは、生産活動に「内部不経済(設備のボトルネックなど)」が発生するからである。そして超長期になると、技術進歩や資本蓄積、産業の成長も可能となり、特に、産業規模の拡大につれ、当該産業内に個別企業の費用低下をもたらす「外部経済」が蓄積されるという。職能集団の形成、

また、彼が『経済学原理』で示した「外部経済」の考え方は、その後一世紀の間にM・ポーターの産業クラスター(集積)論などにも結実していった。

放送大学教授 林 敏彦

『経済学原理』の需要・供給分析でマーシャルは、のちに「部分均衡」とよばれるものを示した。それを、フランス出身で彼より八歳年長のワルラス(限界革命の旗手の一人)が『純粹経済学要論』で提示した「一般均衡」という理論との対比でみてみよう。

ワルラスは、市場経済の本質に絡んで、すべての財やサービスの市場が、相互に密接に関連し合いながら、需給均衡(取引の価格と量が決まる)に収斂(しゅうれん)していく姿を数学的概念を用いて描いて見せた。これが一般均衡の分析である。

この理論的構築を説明するために、ワルラスは彼の原始的な「交換経済」などの分析から始め、順次生産を導入し、資本を導入して実体経済の姿に迫る構成をとった。『純粹経済学要論』における

4 全体か個別か

るワルラスの関心は、複雑な現実の市場経済の核心的な部分を、いかに熱力学と同じような体系(数式)として理解するかにあった。発達した市場経済を市場の数に応じた連立方程式の体系に写し取ったわけで、ワルラスは明らかに一人の天才だった。

一方、マーシャルにとって、すべての市場がつながっている市場から、それ以外の財市場からの影響ではなく、賃金体系や雇用慣行などあくまで労働市場内部の技術的・制度的要因の影響などを見極めるのが目的であった。

もっとも、労働市場をめぐるのは、失業という市場内の不幸が、金融市場をふくめ他の市場の変化に、いかに深くかかわるものかという総合的な連鎖関係が理論化されていく。それを大きく発展させたのは、彼の没後十数年を経て「雇用・利子および貨幣の一般理論」を著した門下のケインズであった。

放送大学教授 林 敏彦

述べたが、当時、人間は機械的に欲望や満足を生み出す存在といった見方が根強かつたのに対して、マーシャルは人間の物質的な生活水準の改善を超える、人間性の向上まで視野に入れて、もっと明るい進歩の未来像を描きたかった。

豊かな国のなかに存在する貧困。マーシャルは早くから労働者階級の暮らしに心を寄せた。

労働者階級の人生が満たされたものになるためには、生活水準などがどこまで改善されればよいか。数学から哲学、倫理学、心理学と学問遍歴を重ねた彼は、その解をもとめて一八六〇

年代後半から本格的に経済学に取り組み始めた。

マルサスやミル(古典派)が主張する「人口法則(生活物資などの生産を上回るテンポの人口の増加に伴う貧困拡大)」や「停止状態論(主に先進国における物質的進歩の停止による自然保護)」に描かれるような、労働者階級にとっては悲観的な将来像(生活水準の改善は困難)を打ち破りたいと思った。

それだけではない。前にも

5 人間性の向上

こうした強い意志から書かれたのが、『経済学原理』(馬

場啓之助訳)の最終章である。

そこでマーシャルは、「国民所得の分配」について論じている。経済の拡大につれて「労働の稼得・資本の利子・資本の利潤・土地の地代」への国民所得の分配がどう変化するかを分析し、「有機的」な経済成長を語っている。それぞれに対する所得分配がどのように相互に関連し合いながら、新たな経済発展に結びついていくのか、その循環的メ

カニズムを詳しく述べているのである。

そのうえで彼は、真の経済発展の基調をつくり出すのは、日常的な財への新たな欲望の形成(受動的な人間活動)よりもむしろ、社会進歩などに向けて積極的に働きかける新しい活動(能動的な人間活動)の展開だと考えた。

なぜなら、彼にとつては「生活基準(水準)の上昇は知性・活力および自主性の向上を意味するはずだからである。そして、その意味も込めたい

えで「全住民の生活基準が向上すれば国民分配も大幅に上昇し、各階層各業種の分け前も増大」する好ましい流れが期待できるとした。

産業の発展と技術進歩と人間性の向上が「有機的」に結合されてはじめて、経済は順調に成長していくことができる。これこそ、マーシャルが『経済学原理』の最終章で提示した進歩の未来像だったのである。

放送大学教授 林 敏彦

ルが古典派に比べてそれらを本文から外し、付録として扱っている。

マーシャルは『経済学原理』の初版の執筆に十年を費やした。それが出版されたのは一八九〇年、彼が四十八歳の年である。その後さらに二十年

を超える長きにわたり、いくつもの版を重ね、修正を繰り返している。じつにマーシャルは、半生を自ら「入門書」と位置づけるこの書のために

捧(ささ)げたのである。

6 苦心の「入門書」

彼に詳しい経済思想史家のグレーネウエーゲンによると『経済学原理』はただちに専門家以外も含め幅広い層の好評を博した。一部の古典派が主張するような人口増下の貧困にあえぐ世界ではなく、人間と社会の進歩の可能性を示したことから、新聞は「政治経済学を社会の完全性実現の科学として再提起し、……この本の出現によって、政治経済学は「陰つつな科学」(歴史家のカーライ

ルが古典派に比べてそれらを本文から外し、付録として扱っている。)

ではなくなった」と評した。それだけではない。『経済学原理』の文体を弟子のケインズはこう評した。「マーシャルの『経済学原理』の書き方には、不用意な読者には気がつかないくらい並はずれたものがある。それは感情的にならぬように、また強調も控えめに、工夫がこらされ

ている。その修辭はしごく単純で、飾りけのないものである。それはよどみのない、明快な流れをなしている。経済学についてほとんど知るところがなくとも、聡明な読者を停頓させたりまじつかせたりする箇所は稀(まれ)である」

(「人物評伝」大野忠男訳)

しかも、限界効用や生産関数などを論じる箇所では、微積分、テーラー展開といった数式の表現は不可欠だが、彼

はあえてそれらを本文から外し、付録として扱っている。)

こうした工夫があつてこそ、この書は多くの読者の心をつかみ、経済学への敬意を高めたといえる。

そのような特徴は、マーシャルの若年期の経験に深く関わっている。彼は数学を学ぼうとケンブリッジ大に入り優秀な成績を収めるなど、数学に興味を持ち続ける一方、その後、形而上学などを通じ人間の可能性追求に目覚めた。経済学に行き着いたのは、

数学を活用しながら、その目的を遂行できると考えたからだともいわれる。

数学理解に関しては、数理経済学の巨人であったワルラスをもしのぐほど正確だったとされる。その彼が『経済学原理』の本文で極力数式の表現を避けたのは、理論だけではなく、その向(こう)の現実への迫り方を、専門家以外の人々にも理解してもらいたいと考えたからにはかならない。

数式を多用しては、理論だけではなく、その向(こう)の現実への迫り方を、専門家以外の人々にも理解してもらいたいと考えたからにはかならない。

放送大学教授

林 敏彦

観、歴史観を
示すものだ。
また「マーシャルの方法は、

マーシャルは決して学問的な功名を追い求めなかった。彼は惜しげもなく推敲(すいこう)中の理論を教室で学生に披露した。だから論文が出版されたとき、その内容は多くの弟子や学生の間では既知のことだった。とるにたらない「オリジナリティー」を主張し知的財産権などにこだわる近年の学問の風土とは別次元の世界の住人であったといえよう。

7 考え方の教育

マーシャルは『経済学原理』を自ら入門書と位置づけ、そこに盛り込んだ独自の概念・理論についても、やがて誰かが発展させていくはずの「通過点」にすぎないと思っていた。同書の冒頭で「自然は飛躍せず」という有名な格言をアピールしたのも、あらゆる物事は悠久の大河の流れのごとく漸進的・連続的に変化・進化していくという彼の世界

たからだと述懐している。自分の仕事を声に出して考えるというやりかただった。ために、「学生は特定のテーマについての知識だけではなく、経済理論はどっやっ作られていくかを学んだ。まるで自分もその作業に参加しているような気分になって」という。

毎週自宅に学生を招き、幅広い分野の問題について熱心に議論したりもした。学生たちはその底知れぬ学識に驚嘆したといわれるが、重要なのは、彼らの誰もが帰るときには、自分が考えていたことは世の中のためにこんなに重要だったのかという思いを強くしたことである。

そうした師を得てこそ、ピグーやケインズが誕生したのだ。マーシャルの生き方、教え方は最近の教育再生論議にも少なからずヒントを与えてくれると思うのは筆者だけだろうか。

放送大学教授

林 敏彦

時から見据えていたその洞

マーシャルは、経済は本質的に継続的な進化の過程だと考えた。需要・供給均衡の記述も、彼の場合はおおむね定常的な均衡ではなく、複雑で動態的な現実の一瞬を切り取るものであって、それは写真家の手法だったともいえる。その彼が「経済学者のメッ

8 生物学の視点

力(力学)系(数)だ。力学体系(数)の応用は経済学発展には必要だが、それだけでは不十分である。経済社会の複雑な変化を見極める眼がどうしても要る、それは生物学的な視点にほかならない。そう思っていたのだ。このことが脳裏から離れず、死の床では十年後の経済学は生物学に基礎をおいていよう」と語ったほど(経済思想史家グレーネウエーゲンによる)だが、今日に至る進化経済学の発展を当

々の勤労や生産もそうだ。マーシャルにとって、それらは「苦痛」を伴う生活の手段ではなく、消費と同じようにそれ自体が目的であり、創造的行為であり、人格の向上をもたらす活動であった。

つまり彼自身は世にいう「マーシャル経済学」の先を見据えていたわけである。ドイツ歴史学派の蓄積も数学も倫理学も、さらには経済学も彼にとってはすべてが究極の目的の準備にすぎなかったともいえる。それは、やはり人間精神と経済社会の共進化(同時進化)の促進に、遠くから寄与することだった。

経済学の枠を超えて彼の哲学やビジョンを共有する人々をマーシャルアンとよぶとしよう。「自分も一人のマーシャルアンだ」と名乗りたくなるのは、私以外にも多いはずである。 || おわり (次回から「ケインズ雇用・利子および貨幣の一般理論」を掲載します)